

山月記

中島敦

朗読 森下潤子

出所 朗読たんぽぽ

〜ことばの綿毛を飛ばそう〜

<http://www.voiceblog.jp/junkoropin/>

teabreak 編

山月記

中島敦

●冒頭部分

隴西の李徴は博学才英、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、※略に帰臥し、人と交を絶って、ひたすら詩作に耽った。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦燥に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頬の美少年の俤は、何処に求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩はすでに遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬこと

が、往年の儁才李徴の自尊心をいかに傷けたかは、想像に
難くない。彼は快々として楽しまず、狂背の性はいよいよ
抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとり
に宿った時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変え
て寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつその
まま下にとび下りて、闇の中へ駆出した。彼は二度と戻っ
て来なかった。付近の山野を搜索しても、何の手掛りもな
い。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史、陳郡の袁※という者、勅命を奉じて嶺
南に使い、途に商於の地に宿った。次の朝未だ暗い中に出
発しようとしたところ、馱吏が言うことに、これから先の
道に人食虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。
今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょう
と。袁※は、しかし、供回りの多勢なのを待み、馱吏の言
葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を
通って行った時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。
虎は、あわや袁※に躍りかかるかと見えたが、たちまち身
を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で あぶ
ないところだった」と繰返し呟くのが聞えた。その声に袁

※は聞き覚えがあった。驚懼の中にも、彼はとっさに思いあたって、叫んだ。その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁※は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁※の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであろう。叢の中からは、しばらく返辞がなかつた。しのび泣きかと思われる微かな声が時々洩れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である」と。

袁※は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢からでてこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となつている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決っているからだ。しかし、今、凶らずも故人に遇うことを得て、恥赧の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、曾て君の友李徴であつたこの自分と話を交してくれないだろうか。